広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学校における漢字教育
Author(s)	マデュラ ゴカレ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 26期 : 8 - 16
Issue Date	2011-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038801
Right	
Relation	

小学校における漢字教育

マデュラ・ゴカレ

外国語として日本語を学んでいる学生にとって、漢字を習うことは難しい。そこで、日本の小学校でどのように漢字を教えているかということに興味を持ち、漢字教育について調べることにした。

日本語の文章は、平仮名、片仮名、漢字の三つの文字からなり、その中でも漢字は大きな役割を果たす。日本語の語彙のうち漢字で構成されるもの、漢字が当てられているものは多く、漢字は児童の言語能力を高めるために重要なである。したがって、小学校で、子供に漢字の力を確実につけることは大切である。

漢字指導は、「形」、「音」、「義」の三つの指導が大事だと言われている。「形」とは、筆順や画数、止め、はらいといったもの。「音」は読み方、「義」は意味である。

小学校の全学年を通して漢字に対して興味を持たせるために、楽しみながら効率的に漢字が習得できる学習方法を開発していくことは大切である。

小学校の漢字教育で重視していることは次の通りである。

１） 読み書き
２） 誤読字や同音異字
３） 各学年における漢字目標
４） 自ら進んで漢字を学びとする能力を育てること

１）読み書き

漢字を教える時、「読み」については「音読み」と「訓読み」の関連は大切であるが、同時に漢字の基礎となる字形や字義を重視しなければならない。

漢字を学習するということは、その読み方や意味を知ると同時に、その漢字も書けるようにするということである。しかし、読める漢字が全部書けるわけではない。

国立国語研究所の調査によると、小学校に配当されている漢字では、読みよりも書きのほうが習得は低い。そのため漢字の指導は一字ずつ覚えこみ、繰り返して書くという練習をしている。しかし、正しい漢字をじっとみつめているだけで覚えられることができる児童もいるし、また漢字を見て指で空書することがもっとも覚えやすいという児童もいる。

ここで重視することは次の通りである。

正しく書くこと

漢字を正しく書くことに慣れさせるために、実際に書くという作業をさせることは大切である。小学校では、初めて漢字を書くことを習うのであるから、指導のポイントを明らかににして、ていねいに指導し、一人ひとりに目を行き届かせることができるようにしなければならない。

正しい書き順で書く

正しい書き順に従って書くことによって、正しく、美しい漢字が書ける。指導しなければ、一年生は漢字に書き順のあることに気づかない。そこで、指導者にとって、どの子も、まちがいなく、筆順通り書けているかどうかをしっかり確かめることは大切である。このような指導を積み重ねていきながら、「上から下へ」「左から右へ」「真ん中から左右に」といった筆順の基本に気づかせていくようにすると、やがて、筆順の予想ができるようになる。また、「右と左」「耳」「子」「土と上」などの筆順を間違えやすい漢字は、特にていねいに指導しておかなければならない。各学年にどうのように書き順指導を行っているかを見てみよう。

書き順の指導

筆順指導のために、特に多くの時間をさくことは必要としないが、既習の文字との関連を十分に考慮して、計画的に行うことが望ましい。

筆順指導の計画について

第一学年

文字に筆順があることに気づかせる。

弟二学年

文字の形が、だんだん整ってくる。

第三学年

基準的な筆順で書くことができる。

第四学年

文字の形・大きさ・配列などに気をつけて、かくことができる。

第五学年

書いた文字のよしあしがわかり、進んで上達しようと努力するようになる。

第六学年

文字の形・大きさ・配列などが整ってくる。

字形を整えて書く

書き順の同時に字形を整えて書くことは大切である。

「止め、はね、払い、折れ、曲がり、反り」などに児童の注意をむけさせる指導が必要である。漢字を書く時、画の長さ、羽ね、反りに注意しなければならない。例えば「天」で

あれば、「長い雲の下に、短い雲がくっついています。」とか、「気」であれば、四画目を書く時に、「はじめはスーッとした気持ちで、次にうれしくなってくるっとまがって、最後はばんざいしてはねがある」などと指導者が、口ずさみながら書いていくと、児童は楽しみながら注意をむけるようになる。また、他の漢字を書く時に、児童が自分の覚えやすい言い方を考えるようにもなってくる。

漢字を指導する際に心がける点として、次の二つが考えられる。一つ目は、漢字を学ぶ必要性や目的意識を持たせることである。漢字交じり文の利便性が分かると、学ぶ意欲が増やし、漢字学習の意味も理解できるからである。二つ目は、つまずきを把握した上での指導の工夫である。表意文字としての漢字を覚えやすく紹介したり、間違いやすく取り立てて指導したりすれば、確実な力になり、漢字を使う自信につながるからである。

漢字を正しく使えるようになるために

「面倒くさい」。文章に漢字を積極的に使おうとしない児童に理由を聞いてみると、理由の大半がこの言葉に集約されてしまう。しかし、本当は「書くのが面倒なのではなくて、どの漢字を使えばよいのかを考えるのが面倒」なので安易に平仮名を使ってしまっているのである。児童に漢字の必要性を理解させることが望ましい。

漢字の必要性を理解させる

漢字を使うと意味が一目で分かり、文章も短くなる。漢字を使うと読みやすいという体験をさせるために、平仮名ばかりで書かれた文を用意し、平仮名ばかりで書かれた文より漢字交じりの文の方が意味がよくとおり、読みやすいことを理解させる。
例えば、

はははははがいたいしいもいたいといいながらうとうとしていた。

漢字交じりの文

母は歯が痛いし胃も痛いと言いながらうとうととしていた。

２）誤字や同音異字

誤字や別の漢字を間違えて書くというのは、大人でもよくあることではないだろうか。ましてや漢字にはそれぞれ意味があるということを十分理解していないこの時期の児童では、うろ覚えの誤字を書いたり読みだけを頼りにして、全く別の漢字を使ったりしがちである。

例は次の通りである。

今日の二時間目に、紙ひこう気を作って、とばしあいをしました。

同音異字

同音異字について書き言葉では意味を区別して認識できているかどうかは大切である。例えば、「A君とB君とはタイショウ的な性格である。」，ここに「対称」と［対象］などの文字を用いたとしたら誤りとされる。

小学校では、どのように誤字や同音異字の指導を行われているかを見てみよう。

誤字や同音異字の指導

児童にとって、漢字を使おうと思って頑張って漢字で書いても、それが間違っているとわかると落ち込むことがある。しかし、間違えた字を書いているのにそれを訂正しないで見過ごすことはもちろんできない。そのために一斉指導で誤字を訂正すると指導を多く取ることによって「間違えて書いた字は正しく直さなければいけない。」「書き直されることは恥ずかしいことでもなんでもない」という気持ちを普段から持たせておくことが大切である。

３）小学校の各学年における漢字教育目標

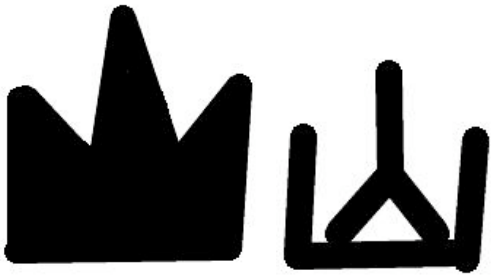
一年生

初めて漢字学習に取り組む一年生の時期に、どのように漢字と出会わせるかが、後の漢字学習に対する興味や習得と大きく関係を持つと考えられる。例えば、新出漢字その読み方を知り、書き方を覚えるだけの漢字だけであれば、初めの間は、漢字を習うという新鮮さから興味を持って取り組むことができても、字数が増えるにつれ覚えることが面倒で、やがては、興味どころか、単調で面白くない学習としてうけとめられるようになってしまいがちである。だから、ひらがなを習得し、文字言語による言語活動に慣れ、漢字に興味を持つようになる一年生の時期に、漢字のおもしろさを知ることのできるような指導の方法を工夫することは大切なことである。

漢字の成り立ちを知ることを通して、漢字が表意文字であることを理解させることが有効である。

・象形文字の指導

一年生の初期に習う漢字は、象形文字が多い。この象形文字の「物の形の特徴をかたどってその物を表す文字をつくる」という特徴をとらえ、漢字一字が物を表すことを理解させる。例えば山の漢字



物の形からそれとよく似た字ができ、しかも、それがその物の意味を表しているのだということをしることは、児童にとって、大きな驚きとしてうけとめられることだろう。この経験をさせておくと、自分の周りの目に見える物は、どのような漢字で書けるのだろうかと次々と漢字に対する興味を持つようになる。

・指示文字の指導

指示文字は、物と物との関係の特徴を文字に表したものである。その関係が、どのように表されているかがとらえやすいようさし絵を工夫する。
例として、上のようなものが考えられる。

＝上の漢字になりました。

・会意・形成文字の指導

この場合は、一つの漢字をとりあげて、指導するよりも、次ページの例のように、語彙として取り上げ、関係づけて、指導すると、おもしろさが伝わり効果があると考えられる。

例

口と鳥で鳴くになります。

二年生

二年生の児童は、一年の時すでに八十字の漢字を学習している。これは小学校生活の六年間で学習する千六字の最も基礎となる漢字である。

漢字の部首については、三年生までにすべて示されるので、二年生でも後半あたりから指導していくことが大切である。

二年ぐらいのうちから漢字はかたなかやひらがなと違って意味を持つものだと、しっかり指導しておきたい。

三年生

同じ漢字でも読み方が異なる漢字があることに気づかせて、使い方と読み方を理解させることは大切である。

例えば、　「通う」と「通る」（使い方）

三年生になると、漢字の送り仮名に注意しなければならない。

四年生

昭和五六年年十月の学習指導要領の改訂では、四年生の漢字配当字数を一九五字から二百字に改善する方針を打ち出している。三・四学年は、ともに二百字が配当され、小学校配当漢字千六字の約五分の二をこの二学年でマスターすることを目指している。言い換えれば、漢字指導に最も力を注がなければならない学年である。三年生になると、漢字の送り仮名に注意しなければならない。

四年生では、表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、国語辞書や漢字辞書の使い方も学習する。五月ごろに国語辞典の引き方学び、十一月に漢字漢和辞典の引き方を紹介する。

五年生

四年生までに漢字の成り立ちを学習した。また、漢字の画数や部首について学習し、実際に漢字字典を利用する経験を重ねつつある。この頃になると、漢字をただ覚えこむということだけでなく、知識を一層広げようとする意欲が見られるようになる。

六年生

六年では国語の読みの指導において扱う漢字の意味も会わせて知的興味をもたせるような配慮をしていくようにする。

言葉としての認識をさせながら読み書きの指導を行う。その際留意したいことは、漢字そのものの意味を教え、同訓あるいは同義の漢字や類義の漢字にも目を向けさせることである。また、部首にも注目させることが大切である。

このように、六学年では、国語科の読みの指導において扱う漢字の指導、字源の意味も会わせて知的興味を持たせるような配慮をしていくようにする。

３）自ら進んで漢字を学びとする能力を育てる

自ら進んで積極的に漢字を学ぶ能力を育てるということは大切である。

・分からない漢字、新出漢字を文脈の中で考えさせる

文章を読む時、読めない漢字が出てくると、立往生する場合が多い。そういう時、文章の中で考える訓練をさせることが望ましい。最後まで自力で読み通すことが大切である。小黒板やカードに書いた振り仮名つきの漢字を手がかりに読ませることは避け、前後の文脈から推測させる。その学習の中で、文脈の中で意味を推測する方法を身につけさせていく。

・漢字を語としてとらえ、意味・用法を考えさせること

一般に漢字指導では、形・音・義・の三つに、筆順と語や文章の中での使われ方が含まれている。文章の中で、漢字を正しく、適切に使わないと分かりにくく、読みにくいということを児童に分からせておくことは大切である。漢字は平仮名とか片仮名とは違うということをはっきり理解させ、漢字は言葉を表すもの、意味を伝えるものとして読んでいくことが望ましい。

・漢字の働きを中心に関連づけて考えさせること

単に一字をいくらていねいに指導したとしても、漢字の働きを中心に関連づけて指導しておかないと意味を理解したり、読めたりする力にならないようだ。共通部分を持つ漢字、形の似ている漢字から出発して、同義語、類語、反対語、同じ意味の漢字二つを組み合わせたもの、意味が反対の漢字を組み合わせたもの、上、下へついて意味を変えるものなどを整理・組織しながら漢字を関連づけて学習していく。この積み重ねが自力で漢字を学習する能力を育成する。

筆順を指導する場合でも既習経験を生かして見通しをたてることによって自ら学ぶことは望ましい。

・漢字を楽しく教えるための工夫

児童は漢字を覚えるのが大変、面倒くさい、難しいなどの思いが強い。漢字力の向上には、楽しい学習環境を作り出すことが大切である。そのためには、指導者による教材の開発や指導方法の工夫が重要である。

・ワークシートやワークブック

漢字教育には、漢字を書くという作業を通した学習をすることが大切である。その際、ワークシートやワークブックを作成し、活用するのが効果的である。次のような指導が行えるように作成する。

・新出漢字、一字ずつについての理解を深め、習得させる指導

ワークシートを作る場合は、文字指導の基本的な事項（読める、書ける、使える、意味を知る）の習得を念頭に、次の事柄が、組み込まれるようにする。

ア）音訓の読み、イ）語句の意味、ウ）構造（部首・画数・字源）、エ）書く（筆順・字形）、オ）熟語‘、同音異字、反対語、類義
ワークシートを作る時、学年に応じて、また、指導したい事柄に応じて、ア~オの項目を考えたうえで、作成することが大切である。

一字だけを取り上げ学習する他に、いくつかの漢字のつながりをとらえて、漢字に対する認識を深めていく。この観点からシートを作成する場合には、漢字と漢字のつながりを活用して、ゲームやパズルの要素を取り入れると、楽しく学習することができる。

・口唱法

漢字の効果的な指導法のひとつとして「口唱法」がある。この指導は下村昇氏が提唱しているもの口で唱えながら手で書き覚える方法である。ただ、書き順を口で唱えるとき、ひとつひとつの漢字をどう分解したりするかを規則化しておかないと、混乱を引き起こす。

・漢字カードづくり

漢字カード作りは根気のいる学習である。漢字カードを作る目的はこれまでの漢字学習で扱った内容を思い出させ、参考にさせることにある。

漢字カードに書くべき内容は以下の通りである。

その漢字の読み方：音読みと訓読みの両方が分かると便利。

漢字の意味。

その漢字を使った言葉や例文。

よく似た漢字があれば、それも書いておいた方がいい。

・漢字指導の際、陥りやすい問題状況

漢字を学習するということは、その読み方や意味を知ると同時に、その漢字も書けるようにするという考え方が教育現場に根強く残っている。もともと読める漢字と書ける漢字は違うものである。このことについては多くの実態調査がある。

「児童・生徒の常用漢字の習得」（国立国語研究所）の調査によれば、小学校に配当されている漢字では、読みよりも書きのほうが習得率が低いとなっている。平均習得率は読み九二・七％、書き六六％となっている。読みの平均習得率に対する書きの平均習得率の割合は、一年九四・四％、二年七九。八％、三年七二％、四年六八・七％、五年六三・六％、六年六五・七％（いずれも東京都の小学校）となっている。この調査から分かるように、漢字の読み書きを同次元に取り扱い、機械的な反復練習を強要するだけでは、漢字力を育てることにならない。

漢字が読めるということはその漢字で作られた語の意味が分かるということである。一字、一字を知っていても語としての意味を知らなければ読めないはずである。ところが、漢字を書くということになると少々異なるようである。読めても書けない場合が多い。

読む力、書く力、基本的には相互媒介的に発展していくものであるが、漢字の読みと書きとの能力の差異に十分気を配り、指導をすすめるべきだと考えられる。

おわりに

現行の漢字配当表は、昭和四十三年度以降変更されておらず、合計九九六となっている。それが、昭和六二年三月の通達「漢字の学年別年配当については、児童の学習の負担や発達段階などを考慮し、漢字の指導が適切に行われるようにその字種、字数を見直し、また、その取り扱いが弾力的にできるようにする」をうけて、小学校における漢字の取り扱いの改善がなされている。

改善の基本的な考え方として、小学校で指導する字数については、

１）児童の学習負担を考慮し、また中・高等学校の漢字指導との関連を見通して、検討し、全体を千六字とする。

２）各学年に配当する字数については、漢字を繰り返し学習することによる効果を期待し、また、低学年において読み書きの基礎を養うことを重視する観点から、低学年の配当字数を現行より若干増やし、高学年の配当字数を若干減らすとしている。

漢字教育では重視されていること

文字として形として漢字を身につけさせるだけでなく、その文字が持っている意味というものを生きた言葉として身につけさせることが大切である。「形・音・義」というものの大切さがあり、そういう生きた言葉として漢字を学習するためには、児童が自ら進んで漢字学習に取り組むというか、挑むというか、アタックするといった姿勢を育てなければならない。

最近コンピュータがよく使われるようになり、タイプしたら漢字が出るから、漢字はできなくてもいいと考える傾向がよく見られる。活字離れ社会と言われる二十一世紀に活躍する子どもに漢字の大切さを分からせるための努力が必要となる。

日本語の勉強をしはじめた時、漢字は難しく思った。将来自分が教える時のために外国語として日本語をどうやって教えているかを調べたい。

参考文献

１）藤原宏(監修)､岡本修一編　1989年3月「アイデアを生かした漢字指導の方法」明治図書
２）平成20年8月「小学校学習指導要領解説　国語編」東洋館出版社
３）久米　平成元年七月「新版漢字指導の手引き」
４）2007年3月「実践国語研究　No.281」明治図書
５）小林一仁　1984年4月「漢字の系統的指導」明治図書
６）吉川芳則　2010年10月「通常漢字改定と漢字指導」『国語教育　Vol.23』三省堂